仕丁木簡一題

はじめに　石神遺跡第15・16次調査（2002・2003年度）で、合計3503点（うち削屑2836点）という大量の木簡が出土した。紀年銘木簡は20点以上あり、乙丑年（天智4年、665年）のものを除くと、乙亥年（天武4年、678年）から壬辰年（持統6年、692年）の範囲におさまり、天武・持統朝を中心とする。内容的には多彩なものが含まれていたが、とりわけ目を引いたのが、仕丁制に関わる一群である。その概要は『紀要2003』『同2004』で報告し、釈文は『藤原木簡概報17』『同18』に掲載したが、考察のいたらない点があったので、補訂をおこないたい。取り上げるのは、第16次調査区の南北溝SD4121から出土した図48の木簡（以下、A木簡）である。

仕丁への米支給簿　A木簡は長さ約30cmある大型の木簡である。（イ）（ロ）の2面からなり、基本的に同筆とみてよい（ただし（ロ）面右下の「一升□」は、文字が若干薄く、軸がずれることから、別筆かもしれない）。両面ともに同じような書式をとり、明らかに一連である。（イ）面の「加牟加皮」「神久」「小麻田」は詳しくわからないが、（ロ）面の「鳥取」「桜井」「青見」「知利布」は三川国青見評（後の参河国碧海郡）のサト名であり、基本的に「二升」という容量を記す。2升といえば、仕丁に対する1日分の米支給量に他ならない。三川国の仕丁に関係する木簡は他にも出土しているので、A木簡は三川国青見評などから貢進された仕丁に対する1日分の米支給簿と推定できよう。仕丁は出身地別に編成される場合が多かったが、それがA木簡にも示されているのである。こうした認識のもと、『紀要2004』『藤原木簡概報18』では、地名比定の可能な（ロ）面を表面として釈文をたてた。

表裏の訂正　その後、2004年12月6・7日の木簡学会の折りに、A木簡を実物展示する機会があった。その際、有益なご意見を多数いただくことができ、新たに判明した点がある。それは平川南氏（国立歴史民俗博物館）によるご指摘で、「加牟加皮手」の「手」は技術者を指すこと、それゆえ他の者とは異なって「五升」という多くの食料米を支給されたこと、よって全体は「加牟加皮手」の率いる仕丁集団として理解できることである。

極めて説得的であり、A木簡は（イ）が表面であると訂正したい。このように表裏関係を捉えれば、「加牟加皮手五升」が冒頭に相応しく大きく書かれ、その下が空白になっているのも合点がゆく。また、（ロ）面で最初の「鳥」を書き損じて、そのすぐ左横から書き改めているのも、裏面の方でより起こりやすいといえなくもない。

図48　石神遺跡出土A木簡　1：2

木簡の廃棄主体　ところで、技術者のもとに仕丁数人を組み合わせる編成方式は、8世紀以後にはごく一般的にみられた。たとえば平城宮跡第104次調査では、東院地区にある南北溝SD3236Cから、次の木簡が出土している（『平城木簡概報12』15頁）。

〔百ヵ〕
「□十五」
・仕丁百三人定□□卅二人木工十四人　鉄工一人

〔人ヵ〕
・仕丁百十七□之中逃□　　□□□卅□

ここでは仕丁は木工や鉄工と併記されており、仕丁の数は木工や鉄工と比べて格段に多い。木工・鉄工と仕丁がペアになる編成をとっていたとみてよかろう。SD

3236Cからは「木工并仕丁粮」と書かれた題籤軸（同14頁）も出土しており、それを裏づける。同じ遺構から出土した他の木簡もあわせ考えると、仕丁が造営現場で使役されたのはほぼ間違いない。

同じことは、A木簡についてもいえよう。A木簡の出土した南北溝SD4121は、石神遺跡C期の遺構を造営する際に一時的に掘削され、埋め立てられた溝である。A木簡の表裏関係が確定した結果、その造営現場に三川国青見評などの仕丁が動員された可能性が強まったのである。

石神遺跡出土の木簡は、内容が多岐にわたり、その廃棄主体も複数あったと考えられようが、平川氏のご指摘によって、ひとつの見通しを得られた意義は大きい。

文字の釈読　とはいえ、未解決の問題も多い。そのひとつが「神久」「鳥取」「青見」の次に書かれた文字（図49－1～3）の釈読である。これが1文字なのか2文字なのか、その確定すら難しい。木簡学会の際「建ア」（建部）とする意見が多かったが、決着はみなかった。この問題は今なお解決できていないが、同じ地点から出土した図50の木簡（以下、B木簡）が参考になるかもしれない。

B木簡は7片からなり、上下端はともに欠損する。左右辺は部分的に削り面を残すので、表裏1行書きとみてよかろう。断片のため性格をつかむのは難しいが、表面についていえば、「取」は「鳥取」、「青」は「青見」の可能性があり、A木簡と一連と考えられる。そこでB木簡の「連人」（図49－4）と書かれた部分に着目すると、どことなくA木簡と雰囲気が似ていることに気がつく。

しかし、A木簡の問題の文字を「連人」と釈読する際、次の点が気がかりである。第一は「連」の「車」部分である。横棒は5本あるべきだが、数が足りない。左の縦画もみられない。だが前者については、同じ木簡の「牟」「神」でも同様であり、さほど問題とはならないであろう。後者の点も、「青見」の下の文字（図49－3）は縦画を表現しているとみえなくもない。また、同じ遺構から出土した部姓列挙の木簡（『藤原木簡概報18』117号）では、「神」の旁「申」を「丰」と書いている（図49－5）。この例をもってすれば、「連」でも縦画の省略された字体も十分にありえよう。第二は「人」の字体であり、同時代史料では事例がない。第三は「連人」の解釈である。前述の部姓列挙の木簡のなかに「連人ア」と読めそうなものがあり（図49－6）、関連が推定されるにとどまる（これを「連人ア」と読んでよいかも実は問題である）。

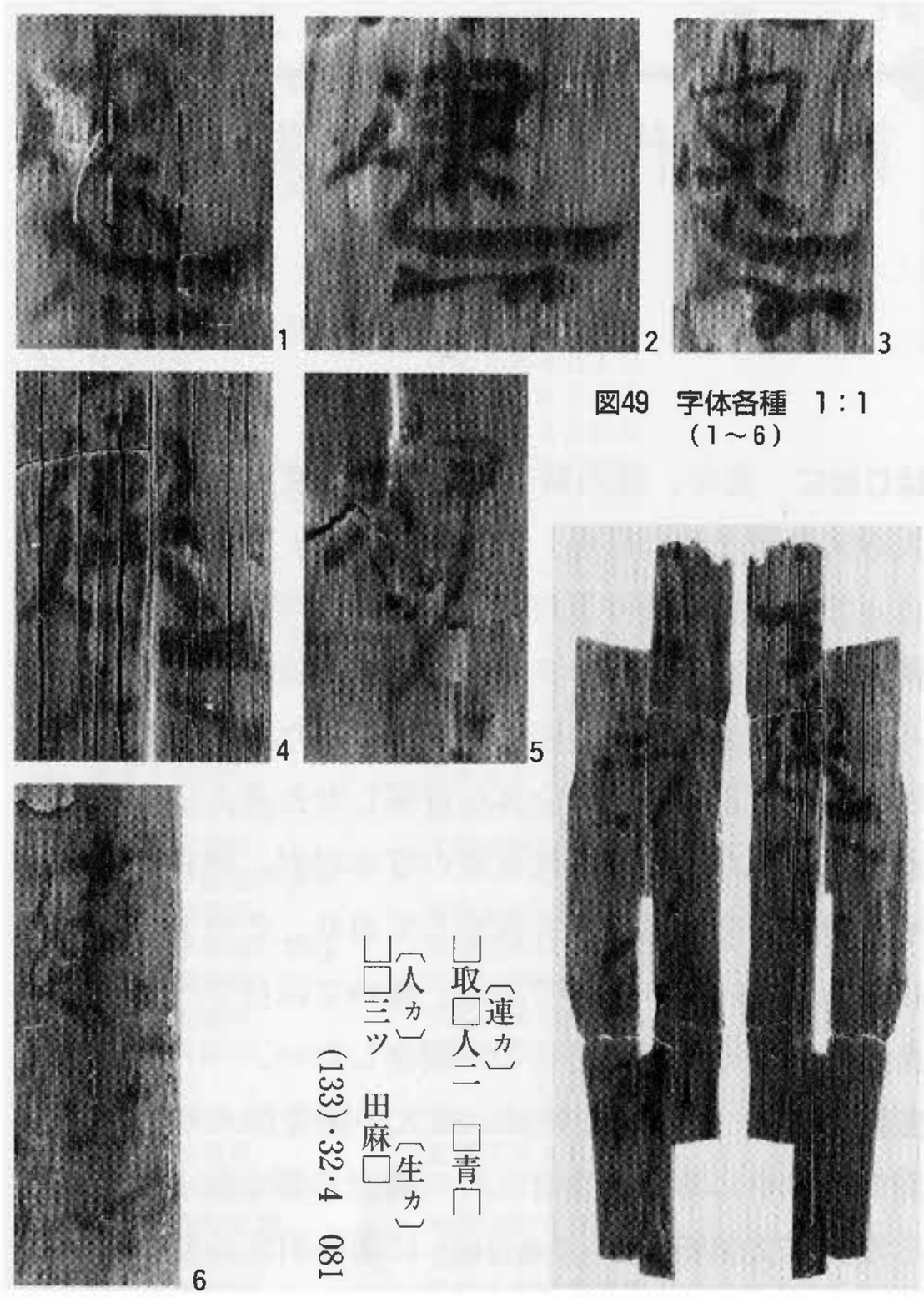

図50　石神遺跡出土B木簡　1：2

結局のところ、「連人」は「建ア」と並ぶひとつの案にすぎない。この文字は上段に限ってみられるのも、何か意味ありげである。中段・下段では、同じ場所に「戸」や「ツ」が書かれたり、何も書かれなかったりする。

中段にみえる「戸」については、同じ遺構から出土した「方原戸仕丁米一斗」と書かれた木簡が参考になる（『藤原木簡概報18』116号）。「方原」は三川国のサト名であり、その次に「戸」と書かれていること、仕丁に対する食料支給簿であることは、A木簡と同じである。仕丁は50戸からなるサトから貢進されることを反映して、「方原戸」「桜井戸」「小麻田戸」と表記したのかもしれない。

下段の「ツ」は、共伴した一連の木簡に「汙久皮ツ戸己也子□」（同113号）とあるのを参考にすると、「汙久皮」と「ツ」を切り離さない方がよいのかもしれない。もしそうだとすれば、すぐ上の「知利布」と同様、何も書かれていないことになるが、単なる省略であろうか。

問題の文字と「戸」との関連が気になるところであるが、明快な解答を持ち合わせていない。この問題について諸賢のご意見・ご批判をいただきたいと考え、また表裏関係を早く訂正したいという思いもあって、あえて駄文を草した。ご寛容を請う。　（市　大樹）